

## 第10回世界剣道選手権大会に参加して

鍋山隆弘

今回、第10回世界剣道選手権大会(平成9年3月27日～30日、於京都)に出場するというチャンスを頂いた。男子選手権の場合は、3年間合宿を行い、対外試合、合宿での試合成績等で選手が決まるのであるが、結果的には警察官9名と文部技官1名となった。稽古する環境には恵まれている警察官のひしめく中、学生を指導しながら自分の剣の道を極めるという信念をもち、教育剣道の道を選択し、選手となった私にとっての出場は、大きな自信となった。しかし、結果はそううまくは運ばなかった。試合の結果は後に述べるが、まずはこの世界大会の歴史にふれ、世界剣道の状況、参加しての感想、試合結果、大会の評価を交えて話を進めていきたいと思えます。

1970年、剣道の国際的普及進行と剣道を通じての相互の信頼と友情を培う事を目的として、日本、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、フランス、ドイツ、イギリス、韓国、モロッコ、オランダ、台湾、スウェーデン、スイス、アメリカ、ハワイ、沖縄の17国・地域(米国とハワイ、日本と沖縄は各々別団体)により国際剣道連盟(International Kendo Federation:省略IFK)が創設され、同時に日本武道館に於いて、第1回世界剣道選手権大会が行われたのが、世界剣道大会の始まりである。

現在の加盟団体は、アルゼンチン、オーストリア、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、フィンランド、フランス、イギリス、ドイツ、香港、オランダ、ハンガリー、ハワイ、アイスランド、イタリア、韓国、ルクセンブルク、マレーシア、ノルウェー、ニュージーランド、ポーランド、ルーマニア、南アフリカ、シンガポール、スペイン、スイス、スウェーデン、中華民国、アメリカ、ベネズエラ、ユーゴスラビア、チェコ、タイ、メキシコと年々増えてきている。

「剣道にも世界大会があるのか」と良く耳にするが、世界剣道選手権大会は、3年に一度開催されており、今大会は36カ国が参加し、京都に於いて第10回の記念大会を迎えた。日本で開催するのは、昭和45年の第1回大会、54年の第4回大会に続き18年ぶり3回目の開催となる。大会は、4日間にわたり行われるが、剣道以外にも居合道、杖道形、日本に伝わる多くの古武道の演武や鎖鎌対剣道、さまざまな対剣道の異種試合が行われ、「武道宗主」日本にふさわしい大会となった。

また、今大会から女子の国際選抜試合が新たに開設され、団体戦(3人制)個人戦(2段以下の部、3段以上の部)が行われた。個人戦は、二段以下の部で、高嶋寿美選手が(筑波大学卒業、福井大学大学院)優勝した。このトーナメントでは、日本人選手は高嶋選手しか出場しておらず、その中、孤軍奮闘、韓国選手が躍進する中、堂々の優勝であった。高嶋選手は、大学在学中には、これといった成績はなく、卒業後にこのような結果を残したことは、先輩として、また、指導者として大変うれしいことである。

3段以上の部では、木下選手、近藤選手を倒し、勢いの乗ってきた韓国のH・Jチョウ選手を延長戦の末に倒した試合巧者の茂木選手(会社員)と、剣風には定評のある木村選手(高校教員)との間で行われた。結果は、両者一本づつ取った後木村選手の面が決まり優勝を決めた。木村選手と対戦した

相手は、スピードに感銘したようであったが、韓国選手は足さばきや姿勢を評価していたようである。このことから韓国躍進の要因が伺われる。

団体戦は、1加盟団体2チームまで参加でき、日本は甲斐、川畑、谷山選手で構成する（警察官）Aチームと佐藤（国士館大）福田（筑波大）大塚（大学助手）で構成するBチームが参加した。予想通りAチームとBチームの決勝となり、代表戦の末、Bチームが優勝した。

女子のレベル差は、男子より大きく、諸外国の剣道人口も男子と比べるとかなり少ないが、技の吸収力、情報網の発達、女子の国際選抜試合の開設を考えると世界普及にかなり拍車がかかるのではないだろうか。

3日目の男子個人選手権では、前回のパリ大会に続き選手に選ばれ出場したが、予選リーグ2回戦で韓国のS・Sパク選手に敗れ、今回もまたメダルを手にはなかった。韓国の選手が力を付けてきているといった情報は、大会前の合宿等でも聞かされ、対応策なども研究していたが、実際に試合を行うのとは大違いで、自分の剣道をする前に負けてしまった。今回の試合に向けた稽古は、職場の協力を得て、大学を卒業以来初めてと言っていいほど詰めて稽古することができた。調子が上がってきていたので悔いが残る。勝負の厳しさを身をもって痛感した。しかし、他の日本選手は順当に勝ち進み、宮崎史裕選手は、準決勝で日本のキャプテン石田利也選手を破り決勝戦に進出を決めた。S・Sパク選手は、準決勝で全日本選手権4回の優勝を誇る宮崎正裕に敗れたものの堂々の3位に入賞し、宮崎兄弟の決勝戦となった。決勝は、兄正裕選手に軍配が上がり個人戦の幕を閉じ、負けた私もほっとした。

4日目に行われた団体戦は、実力差を考慮し1部と2部に分けて優勝を争った。2部は21カ国が参加し、ハンガリーがスウェーデンを基本に忠実な剣道で4-1で下し、2部の初優勝を飾った。ハンガリーの監督は、ベスプレム大学に勤務する日本人の阿部哲史（国際武道大学卒業・筑波大学大学院終了）さんである。阿部さんは、大学院終了後世界に剣道を普及する為、ハンガリーに青年海外協力隊の隊員として派遣されてから現在に至る。優勝に至るまでの並々ならぬ話は良く耳にしていたが、正統派の剣道の世界普及を身をもって実行している数少ない貴重な人材であることを結果で表したような気がする。

1部に参加したした日本は順当に勝ち進み、準決勝でブラジルを、韓国は台湾をそれぞれ5-0で下し、決勝に臨んだ。過去9回大会まで制していた日本は、地元日本で開催されることで大きなプレッシャーを感じていたことは言うまでもなく、本家を背負った決勝の韓国戦では、副将が終わった時点で1勝1敗の同点となり、大将戦を迎えることになった。過去大将戦までもつれたことはなく、会場全体に悲壮感が漂ったが、日本選手権を2度制している日本の大将石田利也選手が、韓国Y・Cパク選手に対し、面を2本決めて日本の優勝を決めた。世界の剣道レベルは、確実に上がってきていることを感じた。

「日本の文化を剣道を通じて学ぶ」そんな雰囲気のある世界の剣道であるが、競技という側面をもって発展してきており、今後の剣道の発展は想像もつかない。ただ、試合が終わった選手同志は正座をし、戦ったこと、剣を交えたことに感謝し、日本式に挨拶をしている。こんな小さな国の礼儀作法が、世界に広まってきている事に大きな意味を感じる。世界に普及してきた剣道であるが、IFKが創設当初に目的として掲げた「相互の信頼と友情を培う事」を大切に剣道が発展してしていくことを強く望んでいる。